

発行：株式会社リンク・インタラック
担当：事業統括部 商品開発ユニット
住所：東京都中央区銀座四丁目12番15号
TEL：03-6853-8265 FAX：03-6859-9070 E-mail：marketing@interac.co.jp



特別支援教育における英語教育を充実させるために

現行の特別支援学校学習指導要領において、小学部の教育課程に外国語活動を設けることができるようになりました。一人ひとりに応じた指導の充実や、自立と社会参加に向けた教育の充実につながる授業が求められています。また、通常の学級に通う子どもたちの間でも個に応じた指導が必要です。今回は英語教育が専門で障害のある学生の学習支援に詳しい愛媛大学教育・学生支援機構英語センターの中山晃教授と、聴覚障害があり、英語科の教員を目指す同大3回生の佐藤千優さんに、どのような授業改善が求められているかをうかがいました。

共通の興味・関心を英語に結び付け
1つのアクティビティで達成感を



愛媛大学教育・学生支援機構英語センター
中山晃教授

——特別支援教育での小学校外国語活動、英語科を取り巻く現状と課題をお教えてください。

コロナ禍となった令和2年度から現在の学習指導要領が実施となり、例えば、特別支援学校小学部において、あくまでも児童や学校の実態を考慮し、かつ必要に応じてということではありますが、外国語活動が実施できるようになりました。外国語活動に関しては、教科化ということではないので、言語活動や行動の基盤となるスキルを評価基準として設定することはありません。児童の特性や実態を考慮するという事は、一定の基準で目標を設定する、ということではないので、児童・生徒の個別の特性とニーズに合わせて教材研究を行い、かつアクティビティなどを考案し、指導案を作成していくことが必要となります。具体的には、自立活動や他の教科との相乗効果が得られるよう、教科内容を精選し、実施する視点が求められます。

特別支援学級においては、在籍する通常の学級と一緒に外国語活動や英語科の授業を受けることもあります。特別支援学級のみで外国語活動をすることもありますが。最近は研究発表も増えてきて理解が広まっていると感じます。

——子どもたちのさまざまな特性、ニーズに応じた活動や授業をするために、どのような点を考慮することが必要になるでしょうか。

近年では、合理的配慮というキーワードの下、様々な手立てが考えられています。基本的には、個々の児童の得意としていること、苦手としていることが、活動や学習にどのような効果や影響をもたらすのか、丁寧に検討することが大切です。

興味関心の共通点を見つけ出し、そこに英語を結び付け、1つの活動に集約させると、達成感や充実感を得られる活動になります。

なお、一斉指導で、多様な特性の児童を対象に行った実践研究もあります*。3つの特別支援学級（知的障害、病弱・身体虚弱、肢体不自由）を合同で行う合同学級という形態での外国語活動を実施し、1つの教室で、3つの特別支援学級の児童たちが学べるように工夫しました。

「オリジナル紙芝居」というアクティビティで、それぞれの児童が好きな動物を、好きな色で画用紙に描き、一つの紙芝居を作り上げるというものでした。児童みんなが「動物が好き」ということを共通点として見出していたということがポイントです。完成した絵をスキャナーで読み取り、電子黒板を用いて順番に映し出して、児童が移動することなく、どの場所においても紙芝居を披露することができるようにしました。発表の際には、児童たちに馴染みのある「きらきら星」のリズムに合わせて、「Green Horse, Green Horse, What do you see? I see a Blue Rabbit looking at us.」のように、どのような動物が出てきても、単元で扱うフレーズが上手く音楽に合わせて入れられるようにしました。

聴覚に障害がある児童には、平仮名の字幕をつけるなど、理解支援となる補助をするなど、様々な児童の特性が混在する合同学級ではありましたが、既習の歌や単元のフレーズを、安心して学習できるような配慮がなされていました。児童のアイデアや好みを自由に取り入れることができるオリジナルの紙芝居の作成は、クラスのみならず一緒に一つのものを作り上げることができたという自己効力感にもつながる実践と言えるかもしれません。

*原田・三浦・刈田・中山（2014）「ユニバーサルデザインの外国語活動へ 特別支援学級での実践から 第5回 合同学級での外国語活動」[英語教育] 63巻5号 54-56

——通常の学級において配慮の必要な子どもが、外国語活動や英語科に参加するための授業や教材の工夫は、どのようなものがありますか。また、担任の先生に留意してほしいことはありますか。

通常の学級において様々な理由で教育的な配慮が必要となる児童にとって、外国語活動や英語の授業が、他の国語や算数、理科、社会などの教科学習と異なり、どのように見えているのか、様子をうかがってみても良いかもしれません。教科書を読み、先生の説明を聞いて、先生からの問いや問題に答えたり、ノートをまとめたりするという一般的な授業中の活動に比べて、歌を歌ったり、ジェスチャーなどを使い、友達と会話をしてみたり、表現してみたりと、外国語活動や英

語の授業では、学びのプロセスに相違点が多くみられます。これらの活動に興味・関心を示す児童がいる一方で、そのような活動に苦手意識や、不慣れな様子を見せる児童もいます。

体育や図画工作、音楽など、様々な教科で見ると、どの児童もそれぞれ得意や不得意があります。ある特定の児童のみが、どの教科においても配慮の必要な児童という観点で見るとはならず、他の児童と同じような視点で捉えてほしいのです。興味や関心を示している活動は何か、また逆に、苦手意識を感じている活動は何かを見極め、学習内容や活動内容を、児童が深められるように手立てを考えたいものです。小学校では担任の先生がほぼすべての教科で様子を観察できる環境を生かして、授業をカスタマイズする必要があります。

誰もが「学ぶ楽しさ」を感じられる英語の授業を



愛媛大学教育学部3年生
佐藤千優さん

——愛媛大学で専攻の勉強と並行して、同大の英語教育の選抜プログラム「英語プロフェッショナルコース」を履修しているとのことですが、これまでの学校生活で英語をどのように学んできましたか。ご自身の工夫や、学校や先生の配慮、環境の整え方などを教えてください。

私は現在、聴力が右耳110dB、左耳は80dBで人工内耳と補聴器を装着しています。小中学校は難聴学級、高校は1クラス50人の一般の私立高校に通いました。小学校では2学年ずつ、児童4人に難聴学級の担任、ALTで外国語活動を行っていました。絵カードの活用で理解できたし、楽しめましたが、先生がカタカナ英語で黒板に書いてくれるのを待っていて「英語で聞く」経験は少なかったです。

小学4年から公文式の英語学習を始めていたので、中学校では、文法もリスニングも困ることはありませんでした。それでも読む速度が速くなるにつれ、点数が取りにくくなりました。カタカナ英語を卒業して、発音記号をもとにシャドーイングで発音練習をしていました。高校受験では、座席近くにスピーカーを置き、音量を自分で調節する形で受験しました。

高校では初めて50人クラスの中での英語の授業でした。授業でのリスニングは事前にスクリプトをもらうようにしていました。定期考査や模試では別室受験にしてもらったのですが、いい結果を出せずに自信を失っていましたが、センター試験ではリスニングは免除を受けられることを知り利用したりしました。また、高校時代は2年生の時に英検2級に合格できました。ライティング、リーディングでリスニングの分をカバーできたと思います。

——現在の研究テーマを教えてください。

「聴覚障害児の英語教育」がテーマです。高校生のときに手話が世界共通ではないことを知りました。アメリカ手話を用いて、日本語を介さずに英語を教えることが可能ではないかと仮説を立て、児童生徒が楽しく学べる指導法や、合理的

配慮を探っていきたいと思います。アメリカ手話を使って英語を指導した実践や研究は少ないことがわかってきたので、教育実習などを通して深めていきたいです。

——これまでの経験や大学での研究を踏まえて、障害のある児童・生徒が学びやすくなるよう、外国語活動や英語の授業に、どのような配慮や工夫が必要だと考えますか。

決めつけはよくない、と思っています。本人とどのような支援が必要かをきちんと話すべきだと思います。「聞こえないからグループワークはできないので、先生とやろう」ではなく、何か工夫を見出して欲しいと思います。

聴覚障害児も英語の音声に十分ふれることが大切です。絵や文字などの視覚的情報も合理的配慮ではありますが、聴覚を活用した指導を意識することは大切ではないかと考えます。なぜなら、語学学習は耳を使って学習することが前提だからです。聴覚障害だからといって、初めから音を聞かせずに学習を進めると、英語の音韻認識が育ちにくくなると感じています。その背景には、補聴器や人工内耳の技術がありますが、一方で、健聴者と同じ聞こえ方を確保できない以上は、限界があることも合わせて理解されるべきだと思います。

授業の工夫をするには、特別な方法を模索するより、他の児童・生徒に対して行っている方法を元にして指導法の修正や改良を行うのが良いと考えています。例えば、文字と発音の関係でいうと、英語には発音されない音があります。私はこれに中学生のときに気づいたのですが、それは健聴の児童・生徒も同じように考えていることがあるかもしれません。その意味では、発音されない音に注意を払う指導をすることは、どの子どもにとっても有用だと考えます。

——将来はどのような先生になりたいですか？

小学校1種と特別支援1種、中学校英語2種の取得を目指しています。「人の役に立ちたい。私はいつも助けられる側であるから、助ける側になりたい」という使命感があり、教師として、人の役に立てればと思っています。

私は聞こえないことに対して否定的に捉えていません。聞こえないからこそ気づいたこともたくさんあるからです。「聞こえないから何もできない」とマイナスに捉える子もいれば、「聞こえないことが誇らしい」というプラスに捉える気付き方もあると思います。私が、聴覚障害者の自分を好きだと思えるようになったのは、中学2年のときに視覚障害のある先生と出会ったことでした。「障害は不便だけど決して不幸ではない」「支援を待つのではなく、自分で合理的配慮を言える人になろう」と教わりました。

将来、私は、聴覚障害者のひとつのモデルとして、こういう生き方もあるんだよ、と提示できたらと思います。聴覚障害教員だからこそできる教育実践があると思いますし、「障害認識」を育む授業の推進を通して、聞こえないことが肯定的に受け入れられる環境を作っていけたらと思います。